

令和3・4年度福岡県学校給食研究指定委嘱事業報告書

(兼：令和3・4年度公益財団法人福岡県学校給食会学校給食研究指定委嘱事業報告書)

- 1 学 校 名 北九州市立花房小学校
- 2 所 在 地 〒 808-0108
福岡県北九州市若松区大字小竹 2 2 2 7
T E L 093-791-0544
F A X 093-791-0398
- 3 児童生徒数（学級数） 1 5 4 名（8学級）
- 4 調理場方式 単独調理場 方式

5 研究内容

(1) 研究主題

食への関心を高め、望ましい食習慣を身に付けようとする児童の育成
～地域・家庭と連携した授業づくりを通して～

① 主題の意味

食への関心を高めるとは、地域や家庭、学校における食に関する「ひと・もの・こと」を通して、自分たちの周りにある食について興味・関心をもつことである。

望ましい食習慣を身に付けようとするとは、「食に関する指導の全体計画」に基づいた教科等の学習を通し、児童が発達段階に応じた食に関わる資質・能力を身に付け、食生活の改善や生涯にわたって健やかに生きるための力の向上を目指すことである。

② 目指す児童の姿

本研究では、食に関する体験的な活動や、主として生活科・家庭科・総合的な学習の時間・学級活動（2）における授業実践を通して、学習指導要領で整理された食に関わる資質・能力（三つの柱）に沿った、以下のような力を身に付けた児童を育てる。

資質・能力	目標（最終的な児童の姿）
知識・技能	・食事の重要性や栄養バランス、食文化等について理解し、健康で健全な食生活に関する知識や技能を身に付けている。
思考力・判断力 ・表現力	・食生活や食の選択について、正しい知識・情報に基づき、自ら管理したり判断したりできる。
学びに向かう力 ・人間性等	・主体的に、自他の健康な食生活を実現しようとし、食や食文化、食料の生産などに関わる人々に対して感謝する心を持ち、食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付けている。

<活動指標>

- 食への関心を高め、望ましい食習慣を身に付けようとする児童を育成するため、目指す児童の姿を設定し、「ひと・もの・こと」を生かした授業づくりを行う。

<成果指標>

- 授業前と授業後の「食に関するアンケート」を比較し、学年ごとに設定した食に関する目標について、肯定的な回答をした児童の割合が増加する。
- 令和3年4月と令和4年10月の「食に関するアンケート」を比較し、「朝食を

毎日食べる」と回答した児童の割合（朝食摂取率）が増加する。また、「ご飯やパンとおかず2品以上」食べると回答した児童の割合（朝食の質）が増加する。

③ 仮説

各学年の教育課程の中で、以下のような3つの手立てを講じれば、児童の食への関心が高まり、望ましい食習慣を身に付けようとする児童が育つであろう。

- 手立て1 発達段階に応じた目指す児童の姿の設定(食育の6つの視点を踏まえて)
- 手立て2 食育に関する授業づくりの工夫
- 手立て3 地域や家庭との連携を深める学校全体の取組

④ 構想



(2) 研究の実際（手立てに沿って）

① 手立て1 発達段階に応じた目指す児童の姿の設定（食育の6つの視点を踏まえて）

食育の6つの視点を踏まえ、本校の児童の食に関する実態を考えて、各学年の目指す児童の姿を設定した。そして、目標達成のための「食に関する指導の全体計画」を立て、他教科等との関連を考えた「食に関する指導 年間計画（カリキュラムマネジメント）」を作成し、食に関する体験的な活動や授業を行った。各学年の目指す児童の姿を明確にすることで、体験的な活動や授業内容が若干変わっても、2年間を通した食に関する取組を研究主題に沿ってぶれることなく継続して実践することができた。

<各学年の食に関する目指す児童の姿と主となる視点>

学年	目 標	視点	授業
1	食物の栽培に進んで取り組み、給食をおいしくいただくとする。	①・④	特活生活
2	食物の栽培に進んで取り組み、食材に感謝し給食を好き嫌いなくいただくとする。	①・④	特活生活
3	地域の人やもの・ことに積極的にに関わり、生産者の苦労に感謝し自らの食生活を振り返ろうとする。	④・⑥	総合
4	地域の人やもの・ことに積極的にに関わり、地産地消について知ろうとする。	③・⑥	総合
5	食に関する課題解決に積極的に取り組み、食事の重要性や体の健康について知ろうとする。	②・⑥	家庭
6	食に関する課題解決に積極的に取り組み、必要な情報を収集して健全な食生活の実現に向けて行動しようとする。	②・⑤	家庭総合

② 手立て2 食育に関する授業づくりの工夫

児童の食への関心を高め、望ましい食習慣を身に付けさせることができるよう、「食に関する指導年間計画（カリキュラムマネジメント）」に基づいた、食に関する体験的な活動や授業の中で、①「ひと・もの・こと」を生かした学習 ②ICT機器や学習ノート等の活用の工夫を行った。

ア 「ひと・もの・こと」を生かした学習

令和4年度は、以下のような「ひと・もの・こと」を活用した（太字部分は、4年度新たに活用）。その中から、2つの学年の事例とその考察を紹介していく。

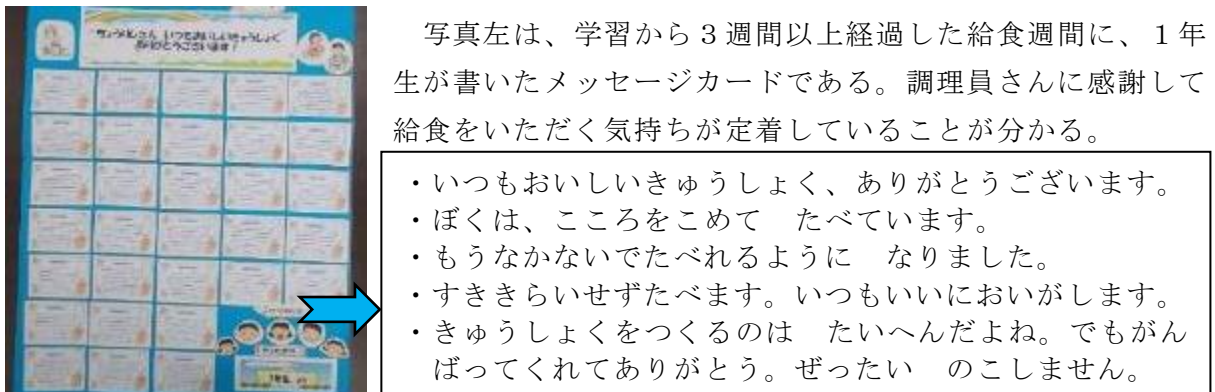
学年	題材名・単元名	ひと	もの・こと
1	レッツチャレンジ1年生 おいしいきゅうしょく ありがとう	農家の青年部 学校給食調理員	はなふさ農園（校内） さつまいもの栽培
2	きゅうしょく大すき、なんでもたべるぞ大きくせん	校務員・栄養教諭 学校給食調理員	プランター畑（中庭） 野菜の栽培
3	好きっちゃ若松 若松野さい（トマト・きゅうり）に挑戦しよう	JA若松職員 農家の青年部	はなふさ農園（校内） 若松野菜の栽培
4	お宝発見！ 若松の特産物のひみつを見つけよう	農業・漁業・畜産業 従事者、 <u>料理研究家</u>	地域の食材 現地取材・ <u>料理教室</u>
5	ぼくのわたしの花房米 <u>食べて元気！ご飯とみそ汁</u>	地域ボランティア （農家）・ <u>栄養教諭</u>	花房米・ <u>地域の食材</u> 稲作体験・ <u>調理実習</u>
6	食生活改善プロジェクト <u>朝食から健康な1日の生活を</u>	カルビー職員 <u>栄養教諭</u>	朝食記録 <u>朝食計画作成</u>

(ア) 1年生の事例 おいしいきゅうしょく ありがとう【学級活動(2)】

さつまいもの収穫を思い出させて、それを調理して給食を提供してくださる調理員さんの苦労や思いを、VTRで視聴させた。



そのうえで、調理員さんに感謝の手紙を書く活動を行った。栽培体験と関連させ、調理員の話聞くことで、感謝して給食をいただく気持ちを高めることができた。

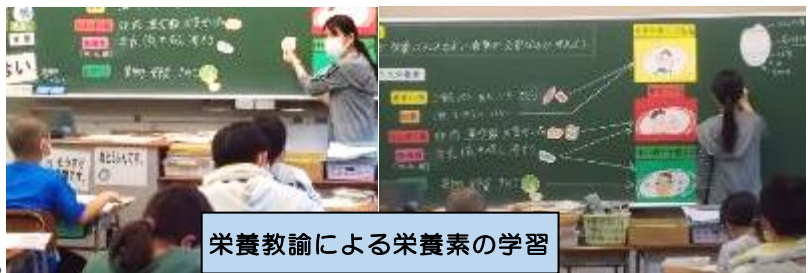


写真左は、学習から3週間以上経過した給食週間に、1年生が書いたメッセージカードである。調理員さんに感謝して給食をいただく気持ちが定着していることが分かる。

- ・いつもおいしいきゅうしょく、ありがとうございます。
- ・ぼくは、こころをこめて たべています。
- ・もうなかないでたべれるようになります。
- ・すききらいせずたべます。いつもいいにおいがします。
- ・きゅうしょくをつくるのは たいへんだよね。でもがんばってくれてありがとう。ぜったい のこしません。

(イ) 5年生の事例 食べて元気！ご飯とみそ汁【家庭科】

総合的な学習の時間で、稲作体験と関連させて行った「食べて元気！ご飯とみそ汁」の学習では、栄養教諭が栄養素や食のバランスなど食の重要性や体の健康について指導することで、自分の食生活に生かそうという意欲を高めた。そして、家族の健康を考えた「わが家のオリジナルみそ汁のレシピづくり」につなげた。レシピの発表の際は、栄養教諭から「栄養バランス」の視点でレシピを評価してもらい、バランスのよいみそ汁を家庭でも作りたいという意欲を高めることができた。



イ ICT機器や学習ノート等の活用（4年生の事例）

4年生は、若松の特産物について調べる場面でタブレット端末（情報収集）、現地取材の場面でデジタルカメラとタブレット端末（取材）を使用した。また、発表の場面でタブレット端末（表現）と大型モニターを使って発表した班もあった。



デジタルカメラとタブレットで撮影

タブレットを使ったプレゼン発表

お礼状

中学年になり、学習範囲や内容が広がるにともない、ICT機器の活用方法も増えた。ただ、タブレットでの撮影は精度が低いため従来のデジタルカメラを併用した。また、児童のタイピング技能の未熟さから、メモの作成や考えを整理する場面では、取材メモやワークシートを使用した。地域の方へのお礼状は心のこもった手書きの手紙とした。取材したことを発表する場面では、機器を使ったプレゼン力の習得が十分でない班もあり、ICT機器の使用に限定しなかった。結果的には、大型モニターを使ったプレゼン発表の他、写真掲示、クイズ出題、寸劇など、これまで積み重ねてきた多様な表現方法での発表が見られ、楽しみながら各班の情報交流ができた。

各学年の発達段階や学習内容に応じた教具（ICT機器や学習ノート等）を活用することは、情報の収集・記録・報告・意見の集約・考えの表現などの点において、学習や体験の効率や効果を高めることが分かった。また、ICT機器や学習ノート等を組み合わせたり併用したりすることで、その効率や効果は一層高まると感じた。ただ、ICT機器の活用には、技能の習得に一定の時間が必要となる。習得状況に応じて既存の教具と併用すれば、安心してより効果的に機器を活用できることを実感した。

③ 手立て3 地域や家庭との連携を深める学校全体の取組

学校全体の取組として、ア・イのような行事的な取組、ウ～オのような地域や家庭と連携した取組、カのような日常的な取組、キ～ケのような広報的な取組を行った。

ア「弁当の日」・・・歓迎遠足の日を「弁当の日」と設定し、家庭に協力を求めて各学年の発達段階に応じた弁当作りにチャレンジさせた。

イ児童委員会の取組・・・給食委員会や保健委員会が中心となって、健康の大切さや給食のすばらしさを伝える活動を行った。

ウ家庭教育学級・・・令和4年度の家庭教育学級では、若松区在住の料理研究家の益元泰江先生を招いて、「頑張りすぎない朝食」をテーマに、料理教室を開いた。

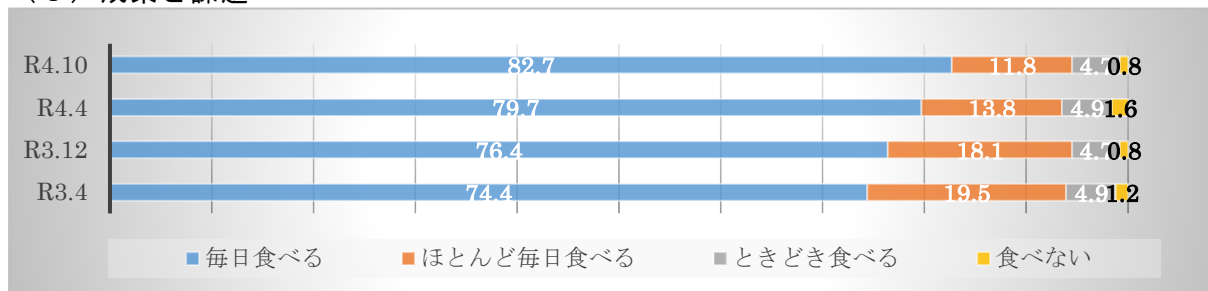
エ親子料理教室 オ農業体験学習（JA職員） カ給食献立の放送

キ学校だより「食育コーナー」 ク食育だより「ぱくぱく」 ケ学校ホームページ

本校の研究は、最終的には望ましい食習慣を身に付けようとする（実践しようとする）児童を育てることが目標である。そのためには、地域や家庭の協力が必要不可欠となる。栄養バランスのよい朝食を考えるとといった学習は、家庭の協力なしでは実現できなかった。学校の食育に協力していただくことを通して、保護者の食に対する考えや関心も高まったように感じた。その協力体制を作るベースとなったのが、弁当の日や委員会活動といった間接的な取組、家庭教育学級や親子料理教室、農業体験学習

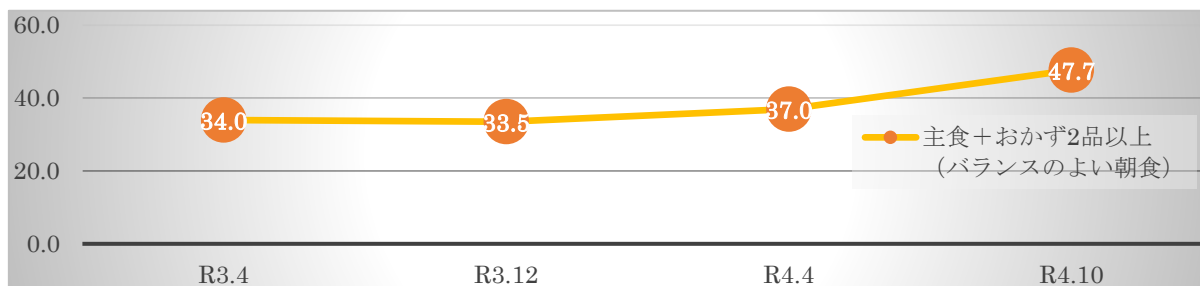
といった直接的な取組、加えて、学校だよりや食育だより、ホームページの食育コーナーといった広報的な取組だったと考える。

(3) 成果と課題



上の帯グラフは、令和3年度の6年生と令和4年度の1年生を除いた、同一児童の朝食摂取の状況を比較したものである。このグラフから、実践を重ねるにつれ、「毎日食べる」と回答した児童の割合が伸びていることが分かる。しかし、「ほとんど毎日食べる」を加えた朝食摂取率は年度当初から約94%と高く、高い朝食摂取率を維持できたということは言えるものの、取組によって摂取率が伸びたと言えるほどの数値の変化ではなかった。

そこで、「朝ごはんには、何を食べていますか（①ご飯やパンだけ ②ご飯やパンとおかず1品 ③ご飯やパンとおかず2品以上 ④その他）」の設問の、バランスのよい朝食と言える③ご飯やパンとおかず2品以上を選択した児童の割合を経年比較した。



すると、朝食摂取率と同様、1年目はほとんど変化がないものの、2年目になると、朝食に「ご飯やパンとおかず2品以上食べる」を選択した児童の割合が増加していた。このことから、バランスのよい朝食を心がけている児童が増えたと推測される。

以上、学校独自で実施した令和3・4年度の「食に関するアンケート」における、朝食摂取に関わる共通設問の回答結果からは、1年目の取組では大きな変化が見られなかったものの、2年間の取組を継続したことにより、児童の朝食摂取率や朝食の質（バランスのよい朝食）が改善されたことが分かった。

- これまで述べてきた考察と成果から、3つの手立てを設定し、各学年の教育課程の中で地域・家庭と連携した授業づくりを行ったことで、児童の食への関心が高まり、望ましい食習慣を身に付けようとする児童が育ってきていると実感している。
- 本校の比較的高い朝食摂取率から考え、これ以上摂取率を上げることは難しい。栄養バランスを考えた朝食といった質の面を強化することが大切だと考える。
- アンケート結果から分かるように、朝食摂取率など家庭の協力が必要不可欠な部分は、結果に反映されるのに時間がかかる。実践したすべての取組の継続は難しいと考えるが、設定した「目指す児童像」や実践の手立てを引き継ぎ、地域や家庭の協力を求めながら、粘り強く実践を続けていく必要がある。